歴史・文化サイトカード

通しNo.	1-A-3	更新日	2025/2/20

サイト名　縄文人が暮らした海食洞（かいしょくどう）～権現山洞窟遺跡（ごんげんやま）、サルガ鼻洞窟遺跡

基本情報

区分	□有形　□無形　☑その他
所在地	松江市美保関町
指定別	①「権現山洞窟住居跡」国指定 ②「サルガ鼻洞窟住居跡」国指定
種別	①史跡名勝天然記念物 ②史跡名勝天然記念物
指定／登録年月日	①1942（昭和17）年10月14日 ②1943（昭和18）年9月8日
管理団体／モニタリング	
周辺施設／アクセス	□トイレ　□売店　□飲食店　□駐車場（　　台） 松江だんだん道路川津ICから約16km、約20分。民家の並びが絶えた山裾にある。 なお、サルガ鼻洞窟住居跡は陸上からは現地にはアクセスできない。
留意点	

サイトの解説

歴史・文化

権現山洞窟遺跡は、中海と日本海を結ぶ境水道北側に位置する海食洞窟に残された縄文時代後期・晩期の遺跡。1936（昭和11）年に発掘調査が行われた。成相寺層の流紋岩に幅8～9m、奥行3～4mの海食洞窟が開口している。出土遺物には、縄文土器（縄文時代後期）・石鏃・ヤス・貝類・獣骨などがある。貝類には、サルボウ・カリガネエガイ・バカガイ・シオフキ・オホノガイ・スガイ・イボウミニナ・バイ・アカニシ・テングニシ・レイシ・カワニナなどがみられる。

サルガ鼻洞窟遺跡は、境水道北岸の崖面にある海食洞窟の遺跡で、大小4つの洞窟が並んでいる。現在は船でしか行くことができない。最大規模が1号洞窟で、奥行き約60m、高さ・幅はともに約5mである。1937-1970年の発掘調査で、主に縄文前期から晩期の土器・石斧・石鏃・石錘・磨石・石皿・人骨・ヤス・貝輪・獣骨・鳥骨・魚骨・貝類などが出土している。なかでも後期の土器は「崎ヶ鼻(さきがはな)式」と名づけられ、縄文後期前半の標式土器とされている。石器類は石斧(せきふ)や石鏃(せきぞく)、石匙(せきひ)、磨石(すりいし)などがあり、石錘(せきすい)は200個以上出土している。勾玉(まがたま)や貝輪などの装身具類や、イノシシや鹿などの獣骨、タイやフグ、マグロなどの魚骨、鳥骨などの自然遺物も多い。また、折り重なった状態で数体の人骨が発見され、埋葬が行われていたと考えられる。

地形・地質、生物・生態等

境水道に面した森山付近の海岸には縄文時代の洞窟遺跡が東西2.5kmの範囲に4箇所見つかっている。縄文時代後期の権現山洞窟遺跡もその一つで、流紋岩に形成された約幅8～9m、奥行3～4mの洞窟である。洞窟の分布や形状から、海食洞を利用したものと判断されるが、海食洞の形成時期は不明である。島根半島における海食洞は、海面水位が現在より1mほど高かった縄文海進期（6000～7000年前）以降に利用されるようになったと考えられている。

サルガ鼻洞窟遺跡は美保関町森山の境水道に面した海食崖にある。この崖は今から約1600万年前の成相寺層の流紋岩の溶岩および水冷破砕された角礫岩よりなり、部分的に層状を呈すなど水底火山の特徴を示している。ここでは4つの海食洞窟が確認されている。洞窟の周囲には、高角度で西側に傾斜した断裂が多数見られることから、洞窟の形成にこのことが関わっているものとみられる。2つの大きな洞窟入り口は海水面に接しているが、洞窟内部は数m高くなっており堆積物で覆われている。出土遺物は崩落物で覆われた約2mの堆積層の中から層をなして産出している。縄文時代前期後半以降から後期中ごろまでの遺跡とされている。なお、この遺跡の南のサルガ鼻灯台付近にも縄文時代の洞窟遺跡があり、サルガ鼻燈台洞窟遺跡と呼ばれている。

写真・図等

権現山洞窟遺跡

サルガ鼻洞窟遺跡

参考文献

竹広文明・渡辺貞幸・会下和宏・内田律雄，1993，島根半島洞窟遺跡の研究一島根県八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査一．LAGUNA（汽水域研究）3，117～126.
島根県古代文化センター2009『サルガ鼻洞窟遺跡・権現山洞窟遺跡』